

コ メ ン ト

司会 「それでは大変時間が限られておりますが、三本のご発表を受けて若干の質疑応答の時間を設けさせていただきますと思います。それぞれ異なる聖地を祭場とした巡礼、更にそれぞれ異なる巡礼を説いておられるので、なかなか共通の議論を深めることが難しい状況かもしれませんが、明日の研究集会に繋がるような論点、あるいは今後の巡礼研究の発展に繋がる論点を少しでも出していただければありがたいと思います。

まず最初に、昨年の国際シンポジウムでサンティアゴ巡礼についてご報告いただきました、流通経済大学の関哲行先生からコメントをいただきたいと思います。関先生はヨーロッパのキリスト教社会の巡礼について大変お詳しい方です。」

関 「ご紹介いただきました関です。三本のご報告を聞かせていただきまして、若干の所感を述べさせていただきますと思っています。

内田先生のご報告から述べさせていただきますが、仏教と八百万の神々、神道という多神教のテーマはユダヤ教やキリスト教、イスラーム教でも大きな問題でございます。例えば、今日の大稔先生の発表にもありましたけれども、大稔先生は非常に真面目な研究者でありますから、イスラーム教を決して「多神教」とはおっしゃらないと思います。けれどもユダヤ教、キリスト教、イスラーム教などの一神教にあっても、多神教的要素を含まざるをえません。

例えば、昨年も申し上げましたが、ヘブロンというユダヤの聖地、これはイスラーム教徒にとってもキリスト教徒にとっても大事な聖地でございます。そこにはイスラーム教徒もユダヤ教徒もキリスト教徒もお参りに行く。地中海世界には他にもそういう聖地はたくさんございます。スペインの場合でも、コルドバやトレドのグラン・モスクにみられるように、カトリック教会がモスクに変えられ、再征服された後にモスクが再びカトリック教会に転用されます。『旧約聖書』の主要預言者は三つの一神教で重複していますので、コンベルソ（元ユダヤ教徒）やモリスコ（元イスラーム教徒）がカトリック教会にお参りに行くのみならず、中近世のパレスティナと同様に、イスラーム教徒やユダヤ教徒、キリスト教徒が共に参詣する聖地は少なくありません。そのように考えますと、一神教と多神教という二項対立モデルを再検討する必要がでてきます。

この二項対立モデルは、ヨーロッパ近代が作り上げた歴史的制約をもつ言説に他なりません。大稔先生のご報告にありますように、現実にある信仰の世界（ズィヤーラの世界）というのは、聖と俗、一神教と多神教が重層化した世界です。重層化した世界こそが、ヨーロッパ近代が構築したオーソドクシーの言説（二項対立モデル）以上に、歴史的な現実に近いのだと思います。民衆信仰とかズィヤーラの世界の持っている意味と、理念型としての一神教あるいは文字言語としてのオーソドクシーの世界との相互浸透。そういったことを考えた方が、はるかに生産的な議論ができそうな気がいたします。

それからもう一点ございます。内田先生のご報告ですけれども、権力と巡礼のあり方。これは通時的に考える必要があるのだらうと思います。例えば先ほど1871年の話が出ておりましたが、これは普仏戦争の年でありまして、鉄道網の普及などに支えられ、マリア信仰の有名な聖地ルルド発展の重要な契機となった時期です。フランスが普仏戦争に敗れ、その前後にルルドでマリアが少女の前に顕現し、聖水が「発見」されるという時期であります。聖地と権力、あるいは聖地と巡礼の関係というものを、通時的に考察する重要性を再認識させられたご報告であったように思います。

それからもう一点言わせて下さい。二番目の黒木先生の報告で、世界樹、大宇宙、マクロコスモスとマイクロコスモスというお話がありました。これはヨーロッパ世界では、17世紀の末くらいに科学革命がありまして、その後オーソドクシーの世界から大方、消えてしまいます。それ以前であれば、こうしたメンタリティーは人々の日常生活の中に深く浸透しておりました。17世紀だと思えますけれども、ポーニャ大学に医学部があるのですが、ここでは天文学は医学部の必修科目です。人間の身体の病気はマクロコスモス、神の世界(異界)と連動しているからです。例えばお医者さんが病名を判断する時に、ある人の病気が盲腸であるという時、「今日は木星と土星がこんな位置にあるからあなたは盲腸です」と多分そういう診断になるのだらうと思われます。このようなメンタリティーは、前近代のヨーロッパ社会にあっても、ごく普通のあり方であつたらうと思ひます。

たいへん面白く聞かせていただきましたし、大稔先生にご報告いただいたズィヤーラの世界は、キリスト教やユダヤ教と共通点が多いと思ひます。このような民衆信仰の世界と、エリート(聖職者や僧侶、ユダヤ法やイスラーム法学者)が言う、主に文字言語によるオーソドクシーの世界。両者を相互浸透させて繋げていくと、巡礼研究として面白い研究になってくるように思ひます。以上です。」

司会 「ありがとうございました。宗教的な理念と巡礼者の現実の信仰との問題、それから権力と巡礼の問題、大宇宙と小宇宙の照応の問題、と三点ご指摘いただきましたが、それぞれできましたらご自分のご発表に向けられたコメント以外についても引き受けて、発展的な意見をお願いいたします。それではお願いいたします。」

大稔 「どうもありがとうございました。私のひそかな願ひは、皆様がイスラームに対して持っているであろう、厳密な一神教、砂漠の一神教というようなイメージを揺さぶり、実際には祝祭や歌舞があり、見世物小屋を楽しむ民衆の世界があるということを知ってもらいたいということでした。そこでは、イスラームと外の世界を分けるものはどんどん薄くなっていく、そういう世界を少しでも垣間見ていただけたらという狙ひがありました。その点で言うと、最初にビデオで少しご説明したメッカ巡礼は、多神教、特に仏教徒などは入れない、閉じているけれども聖なるものへの志向が強い世界。それに対して、後の方で私がお話いたしました参詣、ズィヤーラの方は、誰でも行けるし、歌や踊りもあるというような、もちろん君主も参加いたしました。非常に民衆に身近なものです。そういう意味では、メッカ巡礼に代表されるようなハードなイスラームのイメージと、その掌から零れ落ちるような、さまざまな人間の感情や民衆の慣行、そういうものをすくい上げてきたのが、参詣やあるいはスーフィズムといわれるものだと思います。その両方があってイスラームが展開してきたのでありますし、それがイスラームの強みかと思ひています。

もう一点ですが、関先生が言われた権力と参詣の問題に繋がると、参詣の場所というのは、建物があつて、かつその場所がある程度財力をかけて維持されないと成り立ちません。それはイスラームの場合も同じです。ですから、聖廟や聖者の流行り廃りというように言ひましたが、その流行り廃りの背景には経済的な基盤も重要。それは、先ほど言ひましたワクフという寄進財によるんですが、それによつて立派な廟が建ち、美しい庭園などがあつたりしますと、参詣者が増え、それに従つて後付けで奇跡譚を作ることができます。一方で、ムスリム社会は四国遍路とは違ひ、近代以降にズィヤーラの参詣者が激減しています。メッカ巡礼者は、近代になって大量輸送できるようになって増えています。それに比べて参詣(ズィヤーラ)は、おそらく国家の側がバックアップをしなくなったのではないかと考へておられます。」

黒木 「三点お話頂きました、一つは一神教と多神教の問題、それから権力ないし国家と巡礼のあり方の問題、それから最後、マクロコスモスとミクロコスモスの照応の問題。

その三番目に関わることを少し言いますと、“コスモス”という言い方自体も、西洋の言葉であります。カイルスの巡礼について説明する時には、そういう西洋の伝統的な言葉でしか説明できないのです。マクロコスモスとミクロコスモスの照応は前近代では当たり前であるというのはおっしゃるとおりです。しかし、我々からすると、やはりそういう言葉でしか説明できないというのが事実でして、答になってるかどうかはわかりませんが。

それから、一番目と二番目というのは、私に引きつけて言わせていただくと、巡礼というのは、一神教と多神教という区別以前の問題と思えます。その辺のことは、私の話の中でも申し上げましたような、巡礼の原初的な形態を抑える必要があるのではないのでしょうか。そのような原初的な形態が宗教に取り込まれ、一神教や多神教という問題になっているんだろうということです。

それから権力と巡礼の問題も、やはり国家とか宗教と関わる以前の巡礼の姿をある程度把握しなければ国家との関係、宗教との関係も明確にならないだろうと思います。

だから、私が最初にお話をしたように、巡礼とは人間の素朴な行為である、ということを引きちんと基礎付けた後に、国家と巡礼との関係、あるいは一神教や多神教との関係を考えるべきではないか、というのが先生のお話に対する私の意見でございます。」

内田 「私の方の話に対しては二つですね。

仏教と神道、八百万の神々の話ですが、これは今日の私たちも“仏さん”と“神さん”という形で持っているわけですので、江戸時代を通して、またその後になってもあったのだと思います。ただ、時の為政者との関係で、これらが上からかなり強力に分離させられる動きが、あの時起こったのだと思います。それに対処する形で仏教がドンと入ってきた、逆に言えば、仏教に取り込まれる形で遍路が継続できていったのではないかと考えております。

それからまた、現実にそういう世界が民衆の世界ではないのかというのは、ご指摘の通りだと思います。実際に遍路の札所を回っていて、神仏分離をしてない寺があるのだという印象をもったことが数ヶ所ありました。すなわち、境内の中に鳥居があって、きちんと神様を祀っているということが、現実にあるわけです。時の為政者との関係で仏教に純化するような話を強調いたしましたが、それは表面上のことで、現実には仏教と神道の両方を抱えている、そういう部分もあったということを反映してるのだと思います。

それから権力と巡礼の関係の問題なのですが、去年私が往来手形の報告を準備した時に色々調べまして、もともと巡礼というのは民衆が起こした様々な運動の一つであり、権力の側は、巡礼に出ることを通して民衆が地域から離れることを抑制する側に回ったものだと考えております。従って、この辺りは今日の三つの報告に共通しているのではないかと思います。つまり、巡礼とは民衆側が作り出した運動なんだということでは間違いないと思います。明治維新という非常に大きな変動期で時の権力が国民を全部きちんと掌握する、いわゆる戸籍制度を作っている時でございますので、浮浪している者を取り締まるということは一層厳しくなっていたと思われまます。そのターゲットが巡礼であり、都市に集まる浮浪者でした。

以上、二点ともご指摘の通りだと思います。

大稔さんの話は私も大変興味深く聞かせていただきました。大変面白いのは、信仰のあり方が二つに分かれているということです。特に、同一の人種、国民である信者の中で、巡礼と参詣、それが位置付

けられているというのは非常に面白いと思います。そして同時に、参詣の世界で繰り広げられているもの、大稔さんも多分日本の巡礼との共通点というものをかなり意識的に出してこられたのだと思われますが、相当な共通点を持っているなと思いました。勿論違う面もかなりあるでしょうが。

それから、もう少し私たち自身が具体例をお互いに出し合いながら、それぞれが持っている共通面、そこから導き出される普遍化できるものは何かというようにすると、更に面白い見解が得られるのではないか、とそのような印象を持ちました。」